



Tsukuba Urban  
Transportation Center

TUTC Library - 22

平成10年3月

●座談会

**21世紀に向かったの“つくば”を考える**  
—産・官・学・民 「共生」への課題と展望—

21世紀つくばへの提言 シリーズ 6



Tsukuba Urban  
Transportation Center

TUTC Library—22

平成10年3月

●座談会

# 21世紀に向かっての“つくば”を考える

—産・官・学・民 「共生」への課題と展望—

21世紀つくばへの提言 シリーズ 6



柏木 寛



村上 和雄



中西 房枝



三宮 満雄



神林 章夫



飯泉 淳



神戸 芳郎(司会)

敬称略

## 「21世紀つくばへの提言」

### シリーズについて

日本は今、新しい世紀を間近かにして、高齢化、情報化、国際化、環境問題、地価問題等々、社会経済を基盤からくつがえす大きな転換期を迎えようとしている。

一方、つくばにおいては、研究学園都市建設事業が着工以来30数年をへて、公共交通機関の未整備等、多くの課題を残しながら、漸くその熟成段階に至った。また、常磐新線や圏央道の計画は実施に向けて次第に具体化し、その大規模沿線開発と併せ、つくばは更なる発展が期待されている。

今、このような状況を直視し、これからのつくばの都市建設のあり方について、その基本に立ち返り、議論を広げ、かつ深めることは大いに意義あることと思う。



## 座談会

# 21世紀に向かっての“つくば”を考える ——産・官・学・民「共生」への課題と展望



日 時：平成9年11月6日



場所：つくば研究支援センター テクノホール



### 座談会出席者

司会・神戸 芳郎 ((財)ACCS理事長)  
柏木 寛 (元工業技術院長)  
村上 和雄 (筑波大学先端学際領域研究センター長)  
中西 房枝 (工業技術院分子システム研究室長)  
三宮 満雄 (住宅・都市整備公団理事)  
神林 章夫 (カスミグループ代表)  
飯泉 淳 (つくば青年会議所理事長)

敬称略



---

## はじめに

---

坏 主催者の(財)つくば都市交通センターと(財)研究学園都市コミュニティ  
(財)つくば都市交通センター理事長 ケーブルサービスを代表して一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、皆様、大変ご多忙のなか、当座談会へご出席をいただき誠にありがとうございます。

昨今の著しい社会変動状況のなかで『21世紀に向かったの“つくば”を考える』ことは、科学技術集積都市「つくば」の役割を考えますと、ますます重要な意味をもつものと思います。

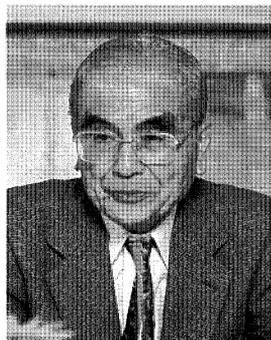
本日の座談会の内容は、(財)研究学園都市コミュニティケーブルサービスの番組として放映し、また、(財)つくば都市交通センターのTUT Cライブラリーとして冊子にまとめて発行することにより、関係先及び市民の方々へ広くご案内する予定であります。

どうか時間の許すかぎり、皆様の忌憚のないご意見をご披露いただき、有意義な座談会にしたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。

最後に、本座談会の開催にあたり多大な労をお取りいただいた(財)研究学園都市コミュニティケーブルサービスの神戸理事長をはじめ、関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。簡単ではありますが私の挨拶とさせていただきます。

神戸 本日はお忙しいところを座談会にご出席くださりましてありがとうございます。この座談会の趣旨でございますが、『21世紀に向かったの

つくばを考える』という、非常に幅広い話  
でございます。現在、世の中を見回します  
と、不景気とか不良債権とか、あるいは改  
革がうまくいかどうかわからないという  
状態で、そのうちにここ何日かの問題を  
見ますと、大きな金融機関が倒れるなど、  
なかなか大変だということになってきて  
おります。



一方、つくばは計画してから30数年、それから概成してからも20年  
近く経ち、市制が施行されてからは10年になります。この区切りの時  
期にあって、人工的な街であるとともに科学と技術の集積という特性  
をもって、その将来が期待されています。ここでこの地域に関わって  
おられて、それぞれお考えを持って責任ある地位にいらっしゃる皆様  
に、まずつくばの現状についてお話をさせていただきます。その中から  
共通の話題、あるいは幅広いご意見をさらにたまわりたいと、考えて  
いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

それではまず最初に柏木先生にお願ひしたいと思います。柏木さん  
は工業技術院、それから慶応大学等に関係をされまして、科学技術の  
振興に今日でも非常に情熱を持って立ち向かっておられる方ござい  
ます。そこで今日、皮切りとして最初にお話をうかがいたいと思いま  
す。よろしくお願ひします。

---

## つくばの現状と街づくりの基本

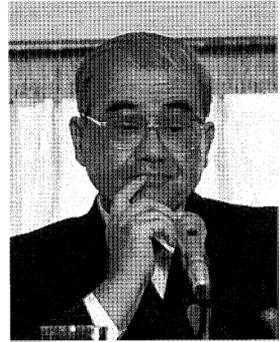
---

柏 木 現状というのはまさに今、現役で、住んでおられる方々が分析されればいいわけで、住んでいない私があればこれ論じるべきではないと思います。

この都市の設計時は、当時ちょうど高度成長期をむかえていて、この都市設計自身がエネルギー多消費的な都市になっていて、当時アメリカ人の来訪があった時に、私は「リトル・トーキョー」というのはあなた知っていますよね。では、「リトル・アメリカ・イン・ジャパン」というのはどこか知っていますか」とたずねる。みんなキョトンとするんですね。「ここだよ。車がないと何もできない。歩いて用足しできるというのは、生活空間になっていない」というお話をした覚えがございます。

その当時から私が感じているのは、ここの住民にならない人による設計と建設というのが進められた、典型的な建設都市という感じがしております。住む人が自分の土地を確保してそこからスタートしたのと、ずいぶん発想法が違っているような気がいたします。

それからもうひとつは、この都市づくりというのは、私は以前から山と平地と湖と、筑波山あり、学園都市があり、土浦があつて霞ヶ浦があるという、そういう学園都市という空間を自分で勝手に胸に描いてまいったのですけれど、現状は全然違います。その当時から県の皆



さんとお話していて一番感じたのは、楽な買収、大きな土地を持っている人が大勢いるところを買収してまわったほうが、楽に都市を拡げることができるというかたちでどんどん進んでいるのが実態だと思うのです。

ところが、やはり私自身も技術にかかわってきましたけれども、技術というのは、そこに土着の民族が生き抜くために考えてきたものです。それを離れてコンクリート詰め空間で物事を考えると、どうしても周囲との乖離が起きてしまうことがたいへん気になっておりました。現役時代からもそうなのですが、その間を埋めるために一生懸命土地の皆さまとの交流をはかってみたり、それからなるべく土浦や牛久に出かけて行ったり、そういう筑波山麓にもちよいちょい出かけてみたりしましたけれども。

そういう形ですね、地域の方々と接触面積を大きく取ろうと努力してきたのですが、私自身が自分で評価してみて、まあ50点に満たない点数しかつけられないのが現状です。そういう意味では、ここの地に根づいた科学技術といいますか、技術開発というのをどう考えていったらいいかという課題は、それ自身、私自身ができなかったことをないものねだりするようなことになるので、あまり現役に重たい荷物を背負わせたくないなという気がいたします。

**神戸** 今、街づくりの基本について貴重なお話をいただいたわけですが、後ほど三宮理事が待ち受けていることですから、またその時にお話があると思います。

次に村上先生にお願いしたいのですが、村上先生は筑波大学の教授

でTARA（先端学際領域研究）センター長として、新しい研究体制の推進を一生懸命なさっている方でございます。最近は私も読ませていただいたのですが、『命の暗号』という、非常にほうほうで評判の良い本です。その中に書いてあることはまさに幅広い話であって、その話だけでもほんとうに何時間もかかってしまうくらいです。

今日は、科学技術の振興という基本計画ができたり、あるいは研究者の任期制とか問題が今いろいろいわれているようですが、新しい研究にたずさわっておられます。そんなことを含めて、つくばの現状について話をさせていただければありがたいと思います。

---

## 筑波大学はひらかれた大学である

---

村上 今、大学におりますので、その立場からお話をさせていただきます。私は21年前に筑波大学へアメリカから赴任しまして、第一印象は広いところだなということと、それから筑波大学は開かれた大学であるということでした。筑波大学は門がないので、門がないことが開かれたと思ったのですが、まあ、そのこともあるのですが、25年くらい前のコンセプトとして大学をとにかく開こうと思ったのです。



何をやったかということ、学部、学科、講座制をつぶすという、これは当時でも今でもたいへん革命的なことを行ったわけです。それがあまり革命的すぎて、むしろ評判が悪い大学であった。

しかし、私は基本的にはこの筑波大学がもっていた構想は間違っていないなかった。むしろ先見性があったと思っております。私どもは専門の領域があまりにも狭いところに閉じ込めりがちなので、それを横に開こう、社会に開こう、世界に開こうという、開かれた大学としての構想としてはたいへんすばらしかったと思います。

それから20年経って、江崎学長を迎えたということ、これもやはり筑波大学が開かれた大学であったひとつの証拠ではないかと思えます。まったく縁もゆかりもないという、しかも民間にずっとおられた方を学長に迎えたということは、大学の基本構想に沿ったのではないか。その江崎さんの発案で、筑波大学と産業界と国立研究機関の、それぞれバックグラウンドの違った研究者が集まって、新しいことをやろうというのがTARAセンターという、私どもが今行っているセンターです。そういう点では、私はつくばに来たことがよかったと自分でも思っています。この方向をできればこれから発展させていきたいと思っております。

**神戸** ひらかれた大学という点になりますと、神林さんは大学、それから流通界にも新風を吹き込んだといわれている方ですが、書かれたものをちょっと読んでみますと、つくばは閉ざされた社会で、それではいかん。それでopen mindとhospitalityということをいわれておりますので、それは奇しくも村上さんがおっしゃったことと、大学教授と元大学教授ですけれど、共通することもあるのではないかと思います、つくばに関しましてご意見をたまわりたいと思います。

---

## つくばの成立とマーケットの変動

---

神 林 大学ということになると、私もなにか話をしなければならぬのですが、まず自己紹介を兼ねて、その前にやはりつくばとカスミということから考えてみたいと思います。

カスミという企業はやはりつくばと同じ年齢、20年から30年経った新しい企業です。

日本の経済成長を代表するように急速にこ



の茨城県を地盤にして発展した企業ですから、いろいろな意味で日本の経済あるいは市場、マーケットの変動に応じた組織の変貌と申しますか、そういうものを考えるうえにおいて非常に重要なポイントになっていると思います。ただ企業をどんなふうこれから存続させていくかを考えた場合に、大手のナショナル・チェーンに対抗して、同じようにカスミを全国化するかということ考えた場合に、ほとんどそれは絶望的なところがあると思えます。

あるいはナショナル・チェーンをいろいろな意味で国際的なマーケットの中で見ていますと、例えばヤオハンもそうですけれど、ほかの大手にしても、世界に出ていってどれくらいの一前前の姿を持っているかという点で疑問があります。そうするとやはりそういうものを追いかけていくというよりは、カスミが生きていくためには、つくばと一緒に成長していかなければならない。それ以外には、私自身この企業を率いていく責任者としてほかの発想には飛びつくことはできない。

それはちょうど信州大学において、我々が信州大学というものをなんとかして生き延びる、あるいは新しい大学の展開のうえに役立たせようとする時、信州という立地条件をどうやって生かすかが非常に重要であったのと同じになるわけですね。そういう点でなんとかつくばも国際都市になる、あるいはカスミも国際的な企業になるというイメージを、そのへんで結びつけておきたかったのですが、これはなかなかそう簡単には結びつかない。

---

### open mindとhospitality

---

さっきhospitalityとかopen mindというご紹介がありました。それはつくばというアメリカ的な都市においてアメリカナイズされたお店と、アメリカナイズされたサービスというものをどこまで徹底するかという我々の課題なのです。それは我々の主体が田舎であり、ほとんど地元採用です。カスミの従業員というのは田畑を持っている人たちがたくさんおりますから、そういう意味では地元を代表して新しい住民の皆さんにサービスしている立場になるかと思うのです。

非常に大きな不満もあると思いますが、でも田舎者には田舎者のいわばhospitalityというものがある。それは我々のような都会から来た人間に対しては非常に押しつけがましくて、あまりいいサービスではないことから始まりました。やはり新しい住民の皆さんとどんなふうにかこの土地を、つくばを創っていくかがカスミの大きなテーマとして依然として残っていると思います。

ただその時にopenということでは、我々自身がそういう土着的

な意味を持って、そこでの生活を持っているわけです。我々のカルチャーといいますか、あるいは生活の技術と申しますか、そういうところから出てくる様々なものを、もう少し国際的な対比の中でもっと見直したほうがいいのではないかと思います。そういった意味で、徹底して私はアメリカを学ぼうと思います。

ただアメリカをどんなふうに学ぼうかと考えていても、日本的な精神は生きているわけです。例えばカスミの創業者は“禪”に凝っておりましたし、この人のいうことは、要するに「お客様に奉仕しろ」ということです。「お金儲けというのは自然にそこからお金が儲かるのだ」ということを申しました。

それが本当なのかどうか私にはよくわかりません。スーパーマーケットというアメリカの技術を取り入れながら、徹底して日本の精神で商売をする。あるいは逆にいうとアメリカとの戦いはまだ依然として続いている古い世代の創業者だったので、そういう人たちの気持ちといたしますか、思想というものもまた生かしながら、勉強はこれからまだまだ続いていこうと思います。

まだこちらに来て8年ですからなんともいえませんが、私の目から見ると新住民、それから古い人たちは、両方ともどんどん年をとって、あまり違いがなくなっているのではないかと感じます。要するに不満だけをいっている人たちの集団のように感じました。ただ、お互いにつくばから外に出ていろいろやるという時もないわけですから、どんな設計であろうが、つくばをなんとか国際都市にもっていくことを、これからも考えていきたいと思っております。

神戸 冒頭に柏木さんがこの街づくりについて、特性を生かしてといわれていたわけですが、神林さんにお話を聞いて、そういうものを生かそうとするのがひとつわかりました。それからもうひとつ、openというのは村上先生もおっしゃったように、要するに自由にということなのか、もっと開かれたということですね。

三宮さんはつい最近まで住宅都市整備公団のつくば開発局長だったわけですが、今は本社の理事です。学校を卒業してから街づくり一筋にやってきて、私が今個人的におつきあいしてみると、非常に幅広い方で、つくばにいる時も単なるハードだけでなく、ソフトの面を生かそうとかなりの種を蒔いてこられた。この街づくりにつきまして、お話をお聞きしたいと思います。

---

## 膨張する東京の新しい街づくり

---

三宮 私が学校を卒業する頃、丹下さんの東京湾構想だとか、東京は爆発的に膨張をしていました。あるいは遷都論などがあり、そういう中で都市づくりの仕事ができるところはないかということで公団があったわけです。

日本住宅公団に入って、最初にやれといわれたのが多摩ニュータウンでした。筑波研究学園都市は閣議決定で、東京の膨張をくい止めるために東京になくてもいい施設を郊外に移して、独立した新都市を作ることでありましたし、多摩ニュータウンは東



京の膨張を計画的に受けとめてきちんとした住宅市街地を作るものであります。高度成長期は、民族大移動的に東京などの大都市に人口が集中しましたので、実際はスプロールした。計画的に対応できなかった自然発生的な市街地に大部分の人が住むということで、土地利用の混乱が起きてしまいました。多摩ニュータウンやつくばは作られたもので、こういうところは少ないわけです。

つくばは特に地理的な条件から申しますと乱開発が起きにくい地域、都市基盤施設であるインフラストラクチャーが何もなくて、計画的に作らない限り人が住めない。施設の建物もできないので、一式全部作らなければならない、計画目標は20万という、地元の人を含めてトータルで20万の目標で、施設の立地の規模などが設定されてスタートしました。

公団の役割は用地取得と都市基盤型体・宅地取得ですが、計画策定は国の仕事でした。用地買収が始まったのは40年ですが、筑波大学の開学が47年ですから7年しか間がありませんので、その間で全部何もないところに作らなくてははいけない。用地買収もして、なおかつ施設の設置をできるまでもっていかなければいけないことでしたから、かなり拙速の仕事でスタートしました。

---

## つくばの街づくりの背景

---

初期の段階はそういう形で昭和55年くらいまで、約10年くらいの間  
に基本的なインフラストラクチャーの整備と、筑波大学の新設、予定  
されていた国立の研究機関の移転が終わって、予定したものが概ね完

成したと思うのです。それなりのスピードで成果があがったと思うのです。

しかし、新しく大学と研究所と宿舍を植えつけただけで、結局街になっていないので、科学博覧会というイベントを使って町おこしができないかと取り組まれました。それはかなり大きな成果をあげて民間の研究所だとか、あるいはそれに付属する住宅だとかいうのがダツと入ってきて街らしくなった。今日でスタートして30年余を経過したのですが、私は一応当初の目標の95%くらい、当初の数字からいえば達成はしていると思うのです。

当時は農地を保全することが前提でしたから、山林・原野を買収して開発することが中心になりました。ある程度の開発区域内に農地も含まざるをえなかったので、そういう地区は区画整理を行いまして、民有地が残りました。

例えば民有地が残ったところは松見公園付近で自然発生的な市街地が形成され、計画開発を補足して、計画開発のまずさを緩和する働きをして今日の姿になっていると思います。

当然、スタートしたときはモータリゼーションを前提にしていまさんでした。バスと自転車という計画だったのですが、モータリゼーションの勢いが非常に激しかったので、結果的には自動車型になってしまった。歩行者専用道路とかバス道とか徒歩でやれるようにしようという計画でおりこまれていましたけれど、実際は自動車の普及と便利さのほうが多くて、皆さんどんどん車を買われて、そのおかげで日本経済がどんどん発展したと思うのです。

結果的にはこの都市はやや自動車型になりすぎたところがあります

けれども。それが現状じゃないかと思うんです。

---

## 現時点でのつくばの評価と課題

---

コミュニティーのあり方についての批判ですが、旧の住民、前から住んでいる人たちはそれなりの利益、経済的な恩恵を受けてはいるけれど、新しく入って来た人々との交流という面では必ずしも十分にいない。また、新しく入ってきた人たちからの批判ですと、つくばの研究学園都市という名前に引かれてきたけれど、はたしてこれが研究学園都市かどうか、宿舍と研究所の往復だけだといわれています。それから当初の時はやや不幸な事件がいくつか起きたりしました。それに対する批判として「つくばは非常に乾いている、ドライでウェットなところがないね」という批判があります。

2700ヘクタールという大きなところに、いわゆる神社仏閣は既存のものがありますけれど、心のよりどころとなるようなもので、新しく作ったものはまったくありません。コミュニティセンター的なものはコミュニティの中心としてあっても、機能しているのかどうかというと、十分ではない。

あるいはセンター地区だとか必要最小限のもの、たとえばショッピング・センターだとか、最低限は作りましたけれど、そこがコミュニティ、人たちの集まるような場所として機能しているかということ、多少は機能しているのですが、科学技術都市にふさわしいような状態にはなっていないのが現状ではないか。

まあ研究学園都市の、都心部につきましても、科学博覧会を契機に

デパートや都市ホテルなどが立地し、今度は国際会議場も立地をします。けれども、科学技術都市として全体の交流活動から見て十分発達していないと思うのです。これらは、これからの課題だと思います。

河本哲三さんがこの前シンポジウムで「つくばは理念なき開発であったけれど、現状は比較的うまくいっている。」とおっしゃっていました。そのとおりだと思うんです。基礎ができて、基本的な骨格はできている青年期の街だと思います。これから何かを生み出しうるであろう。しかし、まだ生み出していない。生み出す可能性は十分ある。克服しなければいけない課題は残っているけれども、それは超えられないハードルではないと私は思っております。

この間、つくばで3年ほど実際に仕事をやってみて、新しい可能性を痛切に感じて、その可能性をできるだけのばして欲しいと思っています。

**神戸** 街づくりの責任者ですから、なかなか苦しいところもあるのでしょうけれど（笑）。当時、東京の過密対策というものが、国自体の政策としてあまりなかったのではないかと思います。したがって、こういう形のものに結果的になってきたので、これからの問題だということですから、後半、どうしたらいいかを十分話をさせていただきたいと思います。

次は中西さんにお話をお願いするのですが、中西さんは工業技術院の分子システム研究室長という、私ちょっと暗記できないくらいの名前で、その前にまだついてるらしい。それから、筑波大学の大学院、今の研究体制の新しい行き方としての連携大学院の教授もなさってい

ます。そのほかには、つくばにお家を持つて。それから主婦でもあります。こういう立場でありますので、研究と街に対するいろんなことについてご意見をたまわりたいと思いますが、よろしく願いいたします。

---

## つくばの教育的環境

---

**中 西** わたくし今、ご紹介いただきましたように、ちょうど18年前に工業技術院センター、研究センターが動きましたので、横浜から移ってまいりました。その時、実は50日の赤ん坊を連れてまいりまして、以後子育てと研究が18年間同時に進行しました。非常に泥臭いというか、生活に忙しかったというのが本当に今までの実感で、今どうやらちょっとわたくし自身の時間ができたというのが実態でございます。



ちょっと簡単に、ここで子育てをどうやってきたかをお話させていただきます。まず並木団地に移ったときに保育園をどうするかということで、すでにあった保育園をたずねたのですが、数が非常に少なく、もう満員でした。そうしたら非常に手際良く団地の中の年配の方がお世話してくださるということで、8カ月間、個人の方をお願いしたのです。以後保育園、小学校、中学校、高校、それから上に娘がいましたので大学と、ここで子供が保育園から大学までの教育を受けるという経験をしてきました。

私は高校まではあまり一生懸命は行きませんでしたけれども、父兄会に行きまして、土地の方あるいは団地の方とコミュニケーションを持つ機会がありました。私にとって、時間的には忙しくてどうしようかなと思ったこともあるのですが、職場だけではなくていろいろな方とも話し合え、自分の成長、子供の成長にはたいへんよかったと思います。

教育の環境で、何が良い環境かということは難しい。けれども、子供にとって、例えば団地の小学校ですと親の職業がみんな公務員と決まってる。普通の世の中はいろいろな職業の方がいますが、つくばではそのへんが偏っていて、例えば大学までうちの娘なんかつくばで過ごしましたので、やはり世間知らずみたいな気がするのですね。今はもう、つくばからは出て働いていますけれども。つくばはやはり良くも悪くも特殊な街という感じがいたしました。

そういう中で、私は、団地から移り、初めて土地の方が町会にいらして話しまして、やはりいろんな意味で私どもの持ってない感覚を持っておられる。それは非常に重要なことだと思いました。ただ町会も限られてまして、だんだん新住民が多くなって、土地の方がなんとなく、居づらくなるような感じですかね。そのへんの区別が、つくば研究学園都市はまだはっきりしすぎているという感じがします。もうちょっと新住民も旧住民も交流しなければいけないのではと思います。

---

## 研究生活の実際

---

仕事の方ですと、私が移ってから、実は横浜にいる時と集中型にな

った場合とすごく違ったのが現実だと思います。柏木先生が研究をリードなさって、ご存じなんですけど、私の研究、いわゆる一兵卒としていわせていただきますと、横浜の時は割合、研究室あるいは個人でやっていました。それがこちらへ来て、とにかくプロジェクトというのがスタートいたしまして、基礎あるいは基礎研究を通じて、それが先端の技術につながるような研究テーマが、ずいぶん華やかに10年間、次世代プロジェクトと称しましてやられてきました。

私が自分の研究のテーマから、ひとつだけ光技術ですか、それに関連するのに多少加わりましたけれども、その部分というのは5年くらい前で、育児があまり忙しくなかった時です。やはりプロジェクト化というのは非常に集中するので、全体としてすごく研究員が忙しくなったと思います。これは当然の事だと思うのです。

それから競争も激しくなりました。これはいいこととして考えるべきだと思うのですが、ある意味では「テーマに沿った研究をやれ」「アウトプットは何か」それが非常にはっきり求められるようになりました。私はここらへんの研究の進め方に対する答えはまだペンディングではないかと思います。

やはり先ほど柏木先生がおっしゃった、土着の技術ですね、そういうものもやはり認識して、かつ先端技術という観点が必要ではないかなと思います。

私もそろそろ卒業なので、あまり大きなこといえませんが、特にも、特に21世紀になって、どのような形で科学技術を、生活サイズ、要するに生活の観点から育て、かつ文明あるいは文化を育んでいくというのが、つくば学園都市で実現されれば非常にいいなという、希

望的な観測を持っているのですけれど。以上です。

**神戸** 主婦と研究員というのですか、研究生活を両立されてきたご経験を、お話ししていただきまして、どうもありがとうございました。

最後になりましたが、飯泉さんをお願いするんですが、飯泉さんは土着ですか、土着という言葉悪いけれど（笑）、そういう意味では非常に私は貴重だと思うのです。現在、J C、J Cというのは若い実業家、そういう若い人の集まりで、地域に非常に興味を持っています。事実、市民会議を毎年行って、提言し、さらに実際活動をなさっている点で私たちも注目しているわけです。

そういうことをずっとやっておられた方で、しかも青年実業家の集まりの中で新しいことを先頭に立ってやっておられるので、つくばの現状に対しては、かなりいろんなご意見を持っておられると思うわけですが、その点よろしく願いいたします。

---

## 学園都市の研究成果と地元の意識

---

**飯泉** つくば青年会議所の飯泉でございます。

つくば研究学園都市の建設構想が持ち上がって30数年経つわけでございますけれども、この地域の基幹産業というものは農業でございます。その中で、この学園都市構想というのは、当時の方々にとしましては本当に驚異的なものでございました。自分たち



の生活基盤というものが失われるのではないかと、非常に不安感のようなものを持ちながら、この学園都市構想を受け入れたような事実があると思います。

そして概成を迎えて20数年ほど経ちまして、また民間のさまざまな企業が進出するきっかけとなりました科学博を経て、今日に至っています。その状況の中で、私は科学技術の集積都市であるこのつくばが、果たしてこの中心部の2700ヘクタール、そこに300もの民間・公共の研究機関、そして1万数千名の研究者のノウハウといいますか、その研究の成果というものが、どれだけこの地域にフィードバックされているのかを、非常に疑問に思う部分があります。

「降って湧いたようなハード面先行型の無機質的な街という印象が強いな」というのが本音でございます。また、これは地元の意識としての本音ではないかなと思っております。

またその研究機関が、もっと見える存在で、我々青年経済人の中にもある程度の経済波及効果を生むようなノウハウとして身近に存在するならば非常に鮮明になるのですが、それがあまりないことでは、今後の課題ではないかなと思っております。これからその研究成果をビジネス化していくための、何かNGO的な組織づくりをしていく時期に来ているかなという感じがいたします。

---

## コンベンション・シティつくば

---

また、広域的な交通システム、実際にはいつできるのか先行き不透明な状況ですが、間近に実現するだろうとの期待感をもっております。

しかし当面私は、99年、再来年にできます、つくば国際会議場をひとつの要にしたコンベンション・シティつくばが、アピールできるひとつの大きな要因になる、起爆剤になるのではないかという感じがいたします。

このコンベンション機能を十分に果たしうるためには、今現在のつくばの状況を見極めなければなりません。また同時にこのつくばの持つ古来の歴史的伝統文化というものはいったい何なのだろうかということの付加価値を我々は探っていかなければならないと思っております。科学技術の集積都市としての特徴と、つくばならではの街づくりの特性を活かしたコンベンション機能がこれから求められているのではないかという感じがいたします。

今これから、産官学という言葉がございますけれども、民をふまえた上でのトータルなコミュニケーション、ネットワークの中で21世紀に対応できるつくばの街づくりというものを考えていく、たいへん重要な時期に来ているなという感じがいたします。以上でございます。

**神戸** 今、地元の方からですね、街づくりのその後について、率直なご意見があったわけです。若い方ですから、その欠点を乗り越えてですね、うまく結びつけて先に新しいものを作っていこうという意欲に満ちたご発言だったと思います。

今ここでひと通りお話をお伺いしたわけですが、分けてみますと、街づくりそのものについての問題がひとつありますね。それからやはり科学技術集積の街ですから、科学技術の進行をどうしていくかがさらにあるかと思えます。そして、みなさん共通していますのは、土地

の特性をどう活かして先端技術に結び付けるのか。街づくり、研究の表し方にどういう具合に結びつけていったらいいのだろうかというのが共通の課題になってきていると思います。

そこで総論みたいなことで終わらせていただきまして、これからは具体的に何をしていたらいいだろうかをお聞かせ願いたいと思うのですが。

---

## 使命誘導型と好奇心誘導型

---

順序は街づくりと科学技術と両方あるのですが、最初に科学技術で新しい研究体制の問題について少し触れさせていただきたいと思います。柏木さんの書かれたものでは、研究開発の加担を使命誘導型と好奇心誘導型という分け方をなされています。国立の研究所というのはそのバランスの上に立ちながら国民の幸福、生活の質の向上というのか、そういうものに結びつけていく必要があるとなっています。それを読ませていただいたのですが、なるほどそうかなと思いました。ここにはなんといっても官の、国立の研究所が多いものですから、そのへんのところをもう少し敷衍<sup>ふえん</sup>していただけるかと思うわけです。

**柏木** 今、おっしゃる使命誘導型、それから好奇心誘導型というのは、若い現場にいる研究者は好奇心がなければ微動だにしないのです。いくら使命感に燃えてといっても、大義名分はわかるけれど、その中に好奇心を動かす何かというのを見いださないと、研究成果というのはい出てこない。

そういう刺激はどういう形で与えられるかという、必ずしも決まった環境があるわけではない。好奇心を燃えさせるようなきっかけは、海外に出ても同じです。日本でいろいろな土地にいても同じですが、その土地の風土、文化だけでなく、風土を含む深い関係に触れて、はっと気がつく場面があるわけです。そういう発想の転換なり好奇心をおこさせるきっかけをつかみたいというのが我々がいちばん望むところなのです。

先ほど飯泉さんがおっしゃっていた、「好奇心だけ駆動したって我々の産業に少しも結びつかない」と、これはよくわかるのです。その好奇心駆動に加えて使命がないとそういうことは起きてこないわけです。その使命はいったい何なのかということは、特に国立研究所の場合ですと、納税者に対してどういう還元をするかという認識の持ち方を要求されるわけです。

先ほど飯泉さんのご指摘の「地元はどういうフィードバックがあったか」については、これは最近の環境論でよくいわれてます。製造工程の中でクローズドのループを作る、ゼロエミッションと呼ばれるやり方と、産業廃棄物を再利用するリサイクル型と、最後のもうひとつは、もっと大きな自然生態系の中での原材料の再生産のサイクル、例えば木材を例にとれば木の育つ年月等を勘案して、そういう大きな自然生態系でのサイクルに従うという3つのサイクルを考えなければいけないというのが、環境問題です。

それと同じように、国立研究所の若者が行っていることを直接役立つもの、それからもうちょっと、リサイクルで戻ってくるリターンと、さらにもっと大きな世界的に貢献した結果として、また地元の産業に

影響力を与えるようなパターンと、その3種類ぐらいがあるということ念頭においてご配慮いただけるとありがたいと思うのです。

これは「高等教育機関をつくばに作ってはどうか」「私立の大学を作ってはどうか」という話があった時にもやはり同じことがありました。県庁の人が「県の住民を優先的に入学させてくれるか」というのです。そうでなければ「大学を卒業した人たちがこの地に残るような道はあるか」と、こういうご下問なのです。

こういう土地に閉じ込めようというサイクルの人材の育て方というのは、今の環境論と同じようにたいへん難しいと思います。長いスパンで物事をお考えになれる余裕を持ったかたちでご検討いただけるとありがたいなというように感じております。

**神 戸** 飯泉さん、仕事を通して、今柏木さんが提言されたことをどう受けとめていくか、何か少しお願いします。

---

### つくばのアイデンティティを見いだす

---

**飯 泉** そうですね、私たち青年会議所といますのは、20歳から40歳までで、その青年経済人の中にいますと——私ももう卒業近くで——40歳近くになりますと老人扱いされるような環境にあります。卒業したあと、いったい何をするかなというのを本当に感じます。

私、本業は医療関係ですから、実際の経済活動そのものに対しては非常に疎い部分がありましたので、異業種の交流の中で青年会議所のメンバーの抱えている、いろいろな業種の実情も、垣間見る機会があ

りました。

つくばにいながら、このつくば青年会議所のもっているアイデンティティ、持ち味というのですか。つくばにいながらどうしてもっと違った、つくばならではの青年会議所活動ができないのかという部分を非常に暗中模索していたことはあります。

そこで今、広域的な街づくりというかたちで、茨城県内地域の青年会議所との連携を踏まえながら、つくば青年会議所がある程度リーダーシップを発揮したかたちで、つくばのアイデンティティを見いだしていこうと活動をしてまいりました。

また同時に、私たちは地域を見直す意味で、その地域特性を活かした自立した街づくりという意味で市民会議をずっと続けてまいりました。今年10回目を迎えるわけなんです、そういう意味で自立した地域特性を活かした街づくりと、広域的な視点での街づくりとは、車の両輪のようにバランスよく機能して、初めて私たちの目指すような、明るく豊かな街づくりの実現につながるのではないかなと感じております。

異業種の中におりますと、社会情勢というものはむしろ中小企業の実情の中から現実が如実に感じられる、匂いが感じられる部分があるのではないと思うのです。その狭間の中にいる私としましては、非常につくばの現状、科学技術の集積都市つくばにいるメリッ的なものは、身近に感じられない。

先ほど柏木先生がおっしゃられましたようにロングスパンでといいますか、これから中長期的な展望に立ったつくばが熟成度を増してきますと、おのずからその姿が見えてくるのではないかなという感じが

いたしました。また、希望も見いだせました。

**神戸** だから、最後にまとめのところでもう一度その問題をやりたいと思いますが（笑）。

国研に今おられる中西さん、そういう国研と地元の人との関係は、どのような形のものが見えたいか、あるいは現にどうなっているかというようなこと、何かありましたらお願いしたいのですが。

---

## コミュニケーションの場の必要性

---

**中西** 現状はですね、私、実はわりあい研究室のほうにこもるような形が良くも悪くも長く続きました。しかしちょうど3年前に国際交流室に移りました。国内の技術あるいは研究の相談窓口としては、技術交流推進センターがあります。その部屋がふたつ並んでいまして、隣にいましたので、国際交流の方は外国人相手、技術相談センターは日本人です。

国際交流のほうはちょっと後にしまして、私が隣から技術相談センターの様子を見ていますと、相談に来るのは中小企業がわりあい多かったようです。それで、地元が割に少ないんですね。

しかし結城ですと、私どものところは繊維に関係しておりまして、かなりありました。けれども、なかなか土浦、あるいは学園の中からの相談は、敷居が高いのか、あるいは役に立たないのか、少ないのが現状です。

実際、まあ、ざっくりばらんにいって研究レベルの話と現場の話をつ

なげる知恵、私どもの勉強不足の部分もあると思うのですけれども、なかなかそっちのほうに力が入らないというのが現状です。やはりまずコミュニケーションの場をどうやってつくるかからスタートしなければならぬのだと思います。

飯泉さんがおっしゃったようにおそらく地元の方が工技院の技術相談センターに行ってみようという感覚が、ここ10何年の間、そういう雰囲気にならなかったことは確かで、そこらへんをこれからどういう形でやっていくかを考える必要があると思います。

最近では工業技術院のセンターも、まずみなさんに知ってもらおうということで、年に一回8月に研究所の公開というんですか、見学会を行っております、最近これにずいぶん力を入れております。「今年それで何かひとつ出さない」と言われまして、ここ2年、私手がけているたいへん薄い膜の研究をどうやって作るか、墨絵流しの原理なんですけれども、そういうことを易しい実験で展示しました。

そうすると、主に小学生中学生が多くて、残念ながらそういう地元の技術者関係の方は少なかったのですが、多少なりとも工業技術院の研究所の実態、あるいはどういうことをやってるかがわかってもらえるのではないかと、思いました。

そういうところから、つまりオープン・インスティテュートですね。そういうことをやっていかなければいけないと思います。なかなか即効的な良い案というのが出てこないのが地道にやっていくしかないと思います。

**神戸** ご努力している実態はわかったのですが、この県がやっています研

究支援センターでもそういうことをやりたいと思っています。聞くところによると、ひとつは地場産業というのがあまりないと、それからあっても、さっきちょっといわれた、レベルが違いすぎてしまってどうしようもない。

そこで媒介するとして、つくばは、だいがぶ研究所も大学もOBの方が多くなってきたようです。つくばクラブという集まりがあって、田崎先生はそういうことの仲立ちをしようという考えがあると聞いています。もっとも、つくばクラブを作っただけで、研究支援センターがそれをどうするかというところまで行っていないようです。今後の宿題として、またお考えがあったらいつていただきたいと思います。

---

## 研究機関とつくば市との連携

---

そこで、国研の方は一応終わったので、あとは大学と、国研の関係方も。つくばは連携大学院ですか、新しい研究体制の特徴にもなっていますから、そういうことを含めまして、大学あるいは国研ですね、その研究体制の問題について、現在の教授である村上さんと、幅広い知識を持っています神林さんの元教授と、おふたりにもう少し研究体制について話をさせていただきますか。

**村 上** 先ほど、開かれた大学と申しましたけれど、実際、大学は構想はそれでも、なかなか開かれていないというのが現状です。

例えばTARAセンターは最初はたいへん敷居が高いというふうにいわれていました。そこをなんとか低くできないかと考えて、TAR

Aセンター内にリエゾン推進室を設置して民間の窓口としています。

また、TARAセンターでは県と連携をとり、茨城県の中小企業の育成にも努力してしています。例えば、つくばクラブの先生方とともに、県内の中小企業の技術相談にも関わっています。

しかし、つくば市との連携はまだ非常に少ないと思います。つくば市の大学、国立研究機関を退職した人が、つくば市に住むようになりつつあります。そのような人達は、長年の経験とネットワークをお持ちですし、つくばでの住み心地も良いとおられるようです。このような人材を活かして、TARAセンターが窓口になって、茨城県やつくば市の民間企業の活性化のお役に立ちたいと思っています。

---

## そして、地元とのコミュニケーション

---

それからもうひとつどうしても今避けられないのは国際化ということです。グローバルな意味でつくばをどう発展させていくかということで、つくばの国際会議場とそれを記念して行われるイベント（サイエンスフロンティア99）をつくばの国際化のひとつの契機にしたらいと思います。江崎学長も先頭に立って取り組んでおられます。

その成果を、すぐには地場産業には結びつかないかも知れないですけれど、少なくとも、つくばにいる若い中学生、高校生、一般市民と、例えばノーベル賞学者の対話みたいなものも計画されています。

まあ、万博ほどのインパクトはないと思うのですが、そういうものができるというのをひとつの契機にして、それを一時的なお祭りではなくて、続けてそういうことをやっていく計画があります。私ど

もの夢としては、つくばを世界に売り出していきたい、というよりつくばが世界にお役に立っていきたくと思っています。それからもうひとつは、実際にこのつくば市の中の活性化というものをどうやっていくのか。特に、私が欠けていると思うのは、地元の人とのコミュニケーションと連帯感です。

そういう点を遅まきながら大学の教師も気づいて、地元の方といかに共生していくかという問題が残されています。事実国際化に関しては、筑波大学の中にはもう1000名くらいの留学生がいるわけですね。これは50カ国を超える。そういう点ではかなり国際化しているわけです。そういった面はかなり進んでいるのですけれど、おそらく地元とどのようなコミュニケーション、どのような共存をはかっていくかということがこれからの問題なのではないかと思っています。

**神戸** 大学の教授というのは最先端の研究と教育もありますから、なかなか大変だと思います。そこで、つくばクラブみたいな話も出てきたのですが、さっきのお話からすると逆に飯泉さんのほうも不平だけではなくて、県のほうにもなにかアプローチしている。あなたは市のほうにも影響力があるようですから、市のほうに向かってもっとアプローチする運動を起こしたらどうですか。

**飯泉** それもそうですが、少なくとも青年会議所も一市民団体でありますし、またそれに付随してつくば市には多くの市民団体もあります。そのネットワークもある程度構築されつつあると思いますので、そういった意味での市民運動の一環として、市行政とともに街づくりを推進

していこうという機運は徐々に生まれつつありますし、実を結ぼうとしている時期ではないかと思います。今後もその推進に努めていきたいと思います。

**神戸** それを醸成して下さい。では、神林さん、TARAの方にもいろいろご関心を持ってなさっているようですし、新しい考えを持っておられると思いますが。

**神林** まあ、そういう相談があった時に、江崎さんにも「私はもともと、もう大学のことはあきらめて、ああいうところはどうなってもいいと思って、辞めてきたわけですから、今さら大学のことをいわれても困るのですよ」といったのです。

ひとつは、人文系、社会科学系、そういうもののひとつの凋落と申しますか、この世紀の変わり目における、非常に深刻な問題があると思います。

江崎さんが「社会科学系の人たちで誰かいい方を推薦してくれませんか」という話になった時に、私が言えたことというのは「40歳以上は、まあダメでしょう。年齢制限で考えた方がいいのではないですか」というようなことを言いました。

やはり、ベルリンの壁の崩壊以来のこの混乱というのはすごく深刻だし、それが私のような元左翼だとか、左翼くずれの間の問題だけじゃなくてですね、同じくそれと付随して頑張ってきた近代



経済学も含めて、相当の混乱状況があるように思います。

ですから、そういう点では私は大学を辞めてホッとしているところがありまして、ウチの息子はまだ大学に残っていますが、まあ、それはそれ「親と子の間というのは兄弟以上に冷たいんだ」といえばそれまでですが（笑）。

---

## アジアの中での日本、そしてつくば

---

そういう点で、さて大学というようなことになると、柏木先生はどうだったか知りませんが、昔の大学というのは、日本の解放、戦後の改革と新しい社会をなんとかしてつくりだそうという、心意気、イデオロギーといいますか、それは右であれ左であれ在ったと思うのです。

そういうような状況で非常に大きく変化していく中で、私が周辺をずっと歩いていて感じることは、日本を取り巻く国々の民族意識といいますか、ナショナリズムの旺盛さです。単にグローバリゼーションではなく、そういうものをどう引き受けるかという、アジアの中での日本とかつくばという位置をもうちょっと鮮明にすることを私は研究者や大学の関係の人たちにぜひ考えてもらいたい。私の現実からいえばそういうことではないか。

例えば、シリコンバレーの話为例にとると、最初は日本であったのか、あるいは韓国であったのか、あるいは台湾だったでしょうか。今はベトナムから、非常にインド人の活躍が目立っています。

そういうシリコンバレーとナショナリズムの勃興というのは関係が

ないはずはないのであって、それは何故アメリカの東海岸ではなく西海岸かということも関連します。そういうようなことでは、つくばというのは、現実につくばのことを知らないアジアの自然科学者はいないわけですから、そういう点でもっと具体的ないろんなことがあるのではないかと私には思えます。

ある人が言うには「本当につくばというのは、出来てみたら貧乏な学者ばかり来て、外国人といってもロクな外国人が来ない。所得も1000万は越えてくれなきゃ困る」と、いろいろなことを聞いた覚えがあります。それでも現実にはそういう人たちがたくさんいて、何も金持ちが集まってこの都市を創るわけではありませんし、そういう点で国際都市の中での、特にアジアという点での目の向け方をしてほしいと思います。

---

## 政治的問題とマスコミ

---

それから、つくばが何故こういうふうになったかという、もうひとつの問題は、政治の問題です。やはり、元県知事の大きな功績は認めないといけなと思います。しかし、だからこそある種の政治的な空白は起きているし、実際、政治というのは動いていかないと困るわけです。

あるいはさっき、青年会議所の話の中で、つくばを突破して周辺の働きかけが始まったのは、すごく立派なことで、政治的な意味を持っていると思いますね。我々の状況の中では、商工会というのはようやく統一されたとはいっても、ある一角の方の人が反対して「それはいやだ。とんでもない、そんなものを統一したら大企業にやられてしま

う」というのですが、大企業がどこにあるかという、カスミのことになるのでしょうか。

一般的に商工会議所というのはいったい何をやっているかという話になると、陰に陽に地元の政治を動かしてるわけですから、私がいろいろ問題になるとすれば、そういう政治には関係ないだろうと思うのです。もう少し政治のことは表に出さないといけないと、私は思います。

それともうひとつは、マスコミの問題。ここにマスコミの方もおられますけれど、政治とマスコミというのは非常に大きな関係があると思うのです。それで、本当にマスコミの方々が政治を批判する時に、それだけの立場というものを通して批判してるかということを考えなければならぬと思います。

私の業界でいえば、このチェーンストア始まって以来この30年、あるいは50年、日本の戦後成長というものを考えて、バブルが弾けても依然として「大きなお店が欲しい」あるいは「商業化への活発化というのは、そういう中核のお店が出てきて初めて出てくるんだ」とか、あるいは「外国から来ればどうの」という話ばかりで、どうしてそれが転換できないのか。大きいことはそんなにいいことなのか。地元の商店街の展開というのは実際どうなっているのかということを考えれば、開発における商業の意味、あるいは開発そのものに対するこれまでの考え方を見直す必要があるのです。

さっき私は元の知事の功績をいいましたけれど、罪悪の方をいうと、開発思想がいかに貧弱なのです。「なんとかワールド」というのは具体的にいわなくてもわかると思いますが、あれはマスコミが支持しなければ、あんな問題は出てこないと思います。なんでこれ以上、人

間を増やさなければいけないのですか。20万都市が30万都市になるとか自然に増えるのなら、それはしょうがないでしょう。

私は依然としてひん曲がったままの開発思想を残しながら、バブルが終わってもどうしようもないと思うのです。

---

## マスコミは何を伝えているか

---

そういう状況の中で、別に考えなければいけないことはアジアの問題です。マスコミも政治も含めて、国際といたら何故そんなにアジアのことをバカにするのか。アジアが貧乏であるといえば、そうかもしれないけれど、アジアは日本に対してひとつのリーダーシップを求め、他方ではいろんな問題で日本をおびやかしている。

おびやかしているというのは、日本の侵略の歴史というものを使いながら、適当に日本を脅かしている。そういうことを私は商業の立場から、ずいぶん身の危険を感じるようなかたちで海外にいるわけです。でも、やはり日本というのは、中国とアメリカと並んで、これからアジアの中での発言権を増していかなければならないと思っております。

そういう点でマスコミの論調は日本の戦後といますか、戦前からの歴史に対する考え方は、もう少し勉強してほしいと思いますね。大学でああいうこと教わって、そのまま鵜呑みにしてるのかわかりませんが、なぜ日本人というのは日本の悪口ばかりいって新聞記事になるのですか。ということも含めて、既成の観念というのがマスコミは全然変わっていない。もう少しそういうものに対する発言の場というのを与えてほしいと、私は思います。

非常に単純なことです。例えば今は不景気なのでカスミの成績が悪くても、新聞記事にならないわけです。やはりカスミも不成績でないとダメなのだ、と。これが新聞記者の態度ですよ。こういうことではないのですかと思うのです。

ただ、みんなが景気が悪い時にカスミが稼いでいるというのは、いかにもおかしいですし、私もなんで稼いでいるのかよくわからないのです。説明がつかないから宣伝したくはないのです。しかし、それが新聞記事にならないというのも問題です。

本当に私は大型の開発は大嫌いなのに、カスミがやるといったらすぐ大きく新聞に出てしまう。なんでこんなこと宣伝するのだというふうに思うのですが、やっぱりカスミというのはそういう潮流の中で注目されてるわけですね。

**神戸** 神林さんならではの話がございまして、私も忸怩たるものもあるわけでございます。そこで三宮さんは、ハードは作ったけれど、ソフトがこれから重要だという論の展開をして、それなりのことをやられています。しかも私はよく言ってるのですが、三宮さんは土木専攻、都市工学専攻の人にしてはというのはちょっと失礼なのですが、非常に幅広い考えを持っている方ですから、今、立場もあるかもしれませんが、特に神林さんがいわれたことについて、何かありましたらお話を聞きたいと思っております。

---

## 日本そのものの存在が問われている

---

三 宮 さっき村上先生が筑波大学の開学の思想「開かれた大学」ということとおっしゃったのですけれど、この地に国立の研究所を集める時の理念に「共同化を徹底すべし」という提起がありました。国立研究所の相当数を集めるということは、共同化をより密接なものにして、従来の縦割りから横割りというのですか、横断的な体制を整えて研究開発を進めていくのだ。そのためには「集中立地がよろしい」ということでありました。しかしながら、共同施設は高エネルギー研究所がありますが、つくばの中ではなかなか共同化が進まないで、今日に至っています。

今日、日本は欧米先進国に「追いつけ、追いつけ」ということで来て、とうとう追いついたわけです。とりあえずは西洋のいろいろなことを学んで追いついて、生産技術もそうとう昂進してそれなりに日本は豊かになる。

今は、その次にどういうふうにするのだという時ですし、世界から日本そのものの存在が問われていると思うのです。日本として果たさなければいけないのは、科学技術という知の分野で役割を果たすことが、どうしても求められているのではないかと思うのです。「つくば」を作ったのは、そういうことに対してひとつの備えであって、これから本当にそれをどう機能させていくのが問われている。

この地域に働いている研究者が地域産業にどんな寄与をしているのかが地域の問題としてあります。その働きが十分なければ、この地域

に研究所はたくさんあっても、ただ研究所があるだけに過ぎなくなります。最近ではできるだけ情報開示するとか、進みははじめましたが、研究所の実際の活動を地域の人たちに知らせて、その成果をわかるようにする、そういう取り組みがないと地域との連携が十分にいかないと思います。アジアとの関係とか国際化の問題もそういうオープンな活動に密接に関連している気がするのです。



1万数千人の研究者がいて、そして団塊の世代を中心に構成されていますから、50代の研究者は30%くらいを占めています。ですから次第に定年を迎える人も増え、いろいろな地域活動への参加の条件も広がりつつあると見てもよいわけですね。それからさらに、そういう人が卒業した後、若い人で埋めなくてはいけない。若い人が本当にここに来て自分の知的創造力というか、ここで一旗あげようとか、あるいは自分の人生をためすに足る魅力そのものをこの地域が持てるかどうか。その時に日本だけではなくてアジアだとか世界から関心を集められるのかどうかということが、重要な課題としてあると思うのです。

ですからそういう意味で、日本の知的な力の集積地である「つくば」の実力が本格的には今問われている。それに対してどう応えるかということではないかなと思ってます。

---

## 公団の役割を探る

---

公団における都市開発についても、インフラをただ作れば自然に街になってくるといふ時代は過ぎています。その地域の活動そのもの、あるいはそこに存在している機関の役割、そこで働いている人がその地域で自己実現がうまく果たされるのかどうか、地域開発やまちづくりに対して問われているのではないかと考えています。

公団についても改革がいられています。従来は住宅や宅地をエンドユーザーに直接供給ということで来たのだけれど「直接公団が住宅を造ったりするのはやめなさい。むしろ、みんなが活動しやすいような条件をつくることに力を尽くしてほしい」と、市場ベースで開発事業が展開できるように仕事のシフトを変えなければという議論をしています。

この地域というのを伊藤滋先生は、前回のシンポジウムで、「ここはどうしても国立の街以外ではないんだよ」とおっしゃるのですね。そこから逃れられない。逃れられないという地域であっても、やはり今、時代的な流れに乗って、それを先導するように、地域づくりを進めていかななくてはならないことが問われていると思うのです。

先導的な街づくりができる条件というのは十分に整ってきています。むしろ整いすぎているというくらいかと思うのですね。そこでどうするのか、みなさんの関心事になりつつあると思います。この街の環境の面でも「ここに住んでみたい。住み続けたい」という人がかなりの数がおられて、仕事の関係でやむなく離れる、あるいは「つくば

単身」という、ここに家族を置いて、お父さんはどこかに単身で働きに行くというようなケースも多くなっている。

そこから次に発展させるにはどうするのか、そのためには何が足りないのだろうかと、どうすればうまく展開するのかということへの関心が変わっていると思っています。

---

## つくばのシリコンバレー化

---

**神 戸** それでは今の問題は最後のシメの時にまた皆さんに何か良いお考えがあったら聞かせていただくことにしまして、グローバル化と国際政治、あるいはナショナリティの問題、アジアの問題といった問題が出てくるわけで、その議論は本当はもっとしたいのです。これは若干ジャーナリスティックになるのですが、つくばのシリコンバレー化というのがよくいわれるものですから。

そもそもシリコンバレーというのは、今非常に騒がれているわけですが、あれは60年くらい経って、紆余曲折があってあそこまできたとか、広い面積である。あるいはそこに、大学と研究者との関係が兼業以上の問題でやっている。そういう土地の特性があって、はじめてああいうものが開花している。

こういう話があるのです。つくばをシリコンバレー、あるいはスマートバレーといいますか、この間もスマートバレー公社の理事長さんをお呼びして話をさせていただいて、いろいろなことがわかりました。

そのへんにつきまして何かお話を聞きしたいと思うのです。村上先生はアメリカに研究に行かれて事情もよくご存じだと思います。最

先端の研究をなされ、そのところをどのように考えられるのか「つくばをシリコンバレー化できるか、できないか」にはじまって「それはとんでもない話だけれど、少なくともこういうことくらいはできる」というお話をしていただければと思います。

村 上　その前にですね、シリコンバレーを作るためには、つくばで本当にいい種があるかどうかが問題です。たとえば、スタンフォード大学という非常に優秀な大学があり、しかもそれがopen mindな大学だったということからシリコンバレーができたのだと思います。そこで、つくばの研究業績が世界に通用するのか、あるいは通用するものがどれくらいあるかという問題があると思えます。まず、そこを突破しないと幾らたくさんの研究者が来てもなかなか難しい。

---

## 解決すべき制度の問題

---

私どもはTARAセンターを作って産官学の共同研究をやろうとし、今の制度内ではギリギリやっているつもりなのですが、国家公務員であることの限界を感じています。たとえば優れた研究者を連れてくる時に、その研究者に相当する十分な待遇を今の制度内では与えることが難しい。研究者は世界的には自由マーケット化してしまっていて、最も自分が研究をやりやすいところに行くわけです。

たとえば、これはちょっと極端な話ですがけれども、スタンフォード大学の教授を10年やって非常に優秀な研究業績をあげた人と、日本のある国立大学でほとんど研究をしていなかった人をつくばに引き抜く

ときに、今の制度では日本の国立大学の教官のほうが給料が高いのです。これはどうしようもないことです。もちろん、研究者は給料だけで働くわけではないのですが、少なくとも今の国立大学の中では、どんなに優秀な私立のアメリカの教授でも日本に引き抜くときには給料が下がる。

そこで、私どもはスーパーTARAを作  
って例外的な制度の実験場ができないかと  
考えています。要するに、筑波大学を作る  
ときには、筑波大学法案を作ったわけです  
ね。今の国立研究機関あるいは国立大学の  
制度を根本から変えるというのはそう簡単  
にはいかない。そこで、今の国立大学とか  
国研を越える、流動性のあるものをつくばに実験場として作れないか  
ということを考えております。



**神戸** 今、科学技術の振興は基本法、基本計画ができ、予算もみんなカットされる時に、科学技術関係の費用だけは増えています。だから、村上先生がいわれたこともチャンスだと思うのです。それに対してどう  
いう力が実現するために必要なのか。私はその世界に疎いからわからないのですが、そういう問題はあるかと思うのです。そのへんのところを柏木さん、どうでしょうか。

---

## 技術と科学、科学技術の違いを理解する

---

柏木 お話をうかがっていて、技術と科学、それから科学技術が、いっしょくたに議論されているのが科学技術基本法案ですよ。それで、科学技術基本法案を通して金さえ出せばノーベル賞学者が産まれると思っている。こういう玉手箱を入れ知恵した人たちがいるわけで、これはまさにマスコミを利用してその地位を確保し、政治家に近づくといい、神林さんがおっしゃるストーリーを地味でいったマフィアの集団です。これを私は科学技術帝国主義集団と呼んでいるのです。そういう人々の動きで物事の大筋が決まってしまう、たいへん危険な状態にあると思うのです。

私はかねがね申し上げているのですけれども、科学というのはヴィトゲンシュタインがいったように「自然を正しく記述する」ということに尽きてしまうわけです。それで、技術とは一体何だというと、先ほど飯泉さんのお話があったように、もしここに地元の農業を主体とする産業があったとしたら、ここ発の、何かそういう土着といいますか「この土地だからこそ工夫された新しい何か」というのがあって、それが世の中に波及していくか、それともそれを高度化して、どこにもない芸術性をおびた技術というものに昇華されていくか、いずれかの道があるはずだと思うのです。

そういうものに触れますと、先ほど申しあげた若い人たちの、それこそ好奇心を誘導させる要因になってくる。やはり技術というのは自然環境があって、そこに住んでいる人が生き抜くために出した知恵に

基づくものなので、これがいちばん基本なのだと思うのです。

自然を正しく記述する、あの諳じた学者が見ていて「それはこういうふうを考えればいいよ」という具合に説明する。よくご存じでしょう、技術指導とは、えてしてそんなものですよ。「これはこういうふうを考えて、こういうふうによればいいのですよ」と、諳じた学問を押しつける。これは空即是色というのだけれど、空を色に押しつけるわけですよ。押しつけて「そうなっただろう」と普及させていくというのが科学技術の道なんですよ。

したがって、科学技術と結構なことを宣っているけれども、世の中のほんの一部しか解決がついていなくて、ほとんどが未解決のままなのです。環境問題もその例ですし、すべての学問がそういう状態であることを正しくみんなに認識してもらおう、という主張をしている数少ない人たちもいるわけで、これはたとえばつくばですと環境研の石井所長がおられて「わからんことはわからん」と若者にはっきりと説明して「ここまで俺たちはやったけれども、後のことはわからんということを書いて、若者に引き継ごうではないか」ということを言っておられるのです。そういう方たちを含めて、技術と科学、それから科学技術というものをいったい何物なのかが解ってから議論を始めていただきたいのです。

今、複雑系の科学とって、それを学問の対象にしたがるかもしれませんが、複雑系も私にいわせれば、先ほどの神林さんのお話ではないですけど、禅哲学に基づく教えに過ぎないのです。

我々が古来からずっとその禅哲学を先祖伝来培ってきたながら、そのものをまず捨ててしまって、西洋の科学技術体系を素直に受け入れた

のです。その箱庭の中で「花を咲かせました。一輪きれいな花が咲きました」といって誇ってみたところで、それが何になるかというのが現実の飯泉さんの問いかけなのだと思うのです。

だから、やはり日本のこの風土の中で培われた、そういう技術を、科学技術化して世の中に広めるとか、何か産業に結びつけることが具体的に必要だといわれているのでしょう。少なくとも私がこの地に住んでいる間にはそういうものに残念ながら出くわさなかった。

少なくとも私自身がエレクトロニクスを専門にしているだけに、実際には、結びつかなかったですね。中西さんは物質工学をおやりになっているからまた話は別かと思えますけれども、そういう機会に恵まれなかったというのはたいへん残念だと思います。



---

## 差別化の世界を容認できるのか

---

いずれにしても、根底にあるべき哲学的背景、文化的背景だとか、そういうものを除外視して、今シリコンバレーだとかうたっています。けれども、そのシリコンバレーについていうならば、私は「いったい日本というのは、資本主義対共産主義の対立の構図がなくなってから、自由経済市場を本当にめざすのか」と言いたいのです。

これははっきりいって差別化の世界だと思うのです。シリコンバレーというのは自由市場化の典型的な例で、強者が残って弱者が死に絶

えていく世界です。それを「本当にここで容認するだけの度量を皆さんお持ちですか」と、お尋ねしたい。それでいて一方で政治家に今、民主的平等社会の構築を政治的に期待しているのも我々の実態だと思うんですね。

21世紀に向けてこの土地がシリコンバレー的な自由主義経済市場の、とにかく差別だとか格差がついても当然だとかたちで割り切って進められるのか。それともやはり大衆に媚びを売って、安い給料で我慢して横並びで進んでいくのか。それは私がとやかく申しあげるべきことではなくて、やはり現役が自決権を持って判断していただきたいことです。

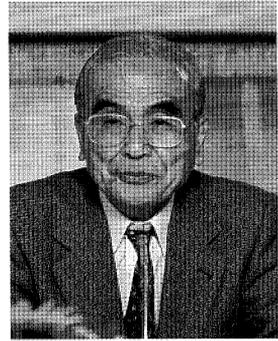
シリコンバレーそのものが、日本に定着するかどうかというのは、やはり日本流のシリコンバレーというのを考えるべきだと思うのです。

**神戸** 非常に耳の痛い話になって「ジャーナリスティックに扱うのではなく、もっときちんと原点を考えてからやれ」ということですね。座談会が始まる前の昼食のときに、「およそジャーナリスティックになるのは、あまりよくない」と言われたことの延長だと思って、腹にこたえて聞きました。

まとめに入りますが、グローバル化の問題、これからのつくばの大型開発の問題、広域圏の問題、あるいは主婦の方ですと住みやすさの問題、教育の問題などたくさんあります。柏木さんが提議された街づくりの最初の問題、それと同時に地元ですんでいる飯泉さんがいわれていた問題。

シリコンバレーはともかくとして、地元との関係、地元の技術をも

っと見なければいけない。今後の街づくりではもう一回原点に立たなければならない、そういう共通の認識が次第にできてきた感じがするものですから、その点について具体的な提案があり、あるいはまたお考えがありましたら、まとめていただいて、今日の締めにしたいと思います。



**飯 泉** 先ほどシリコンバレーのお話が出てまいりましたけれども、シリコンバレーそのものは、技術者優先型の、技術者が非常に高額所得者層で、独自の生活領域を築いています。そしてアジアならびに外国の労働資本のようなものを導入しているという現状です。

また、外国の労働者の居住地は、スラム化を起こしていて、非常に理想的なものと現実とのアンバランスといえますか、ギャップを感じるような部分があります。シリコンバレーそのものが一時期停滞を示して、なおかつそのテコ入れとして、スマートバレー公社ですか、テコ入れがなされたわけですけども、それが今のつくばの現状にストレートに結びついていくのかどうか。

官主導型で始まったこのつくばの街づくりに、どのような役割を果たすセクターが存在するのか。そのへんが一番ポイントではないかと思うのです。ですから、シリコンバレー、イコールつくばという街づくりは、なかなか連動しにくいという感じます。

そういった意味で、私はつくばそのものが確かに科学技術の有数の集積都市であることは間違いございません。また広域的なアクセス網

の充実とともに、つくばは大きく発展する地域であるということも間違いないと思います。

しかしながら、足元からこの地域の特性というものを見直しながら、それを活かしながら相乗効果をもって自立都市圏、そして理想都市を目指していかなければならないと私は思います。

そういった意味で、シリコンバレーと同じパターンでつくばは進みにくいのではないか、まだ時期尚早の部分があるのではないかなという感じざるを得ません。

---

## 環境問題と国際化の重要性

---

**中 西** 私は将来、環境問題が大切だと思います。今確かに衣食住、割合いい状態に来ていると思うのです。しかし環境問題、ゴミも増えるばかりで、なんとかしなければいけないというのが現状だと思うのですね。我々の技術の発展にともなう責任です。

ハイテク化はいろいろ思わぬ問題が起きていることが今の世紀で明らかになっています。そこを考えて、やはり我々科学者、研究者が、対応していかなければいけないことだと思うのです。

あとひとつは、国際化。この問題は、つくばは外国人がたくさん来ておりますので、いろいろ問題点があることは、対応している方はわかっていると思います。例えば、市役所にしても、まだかなりいろいろバリアがあります。つくばは日本のほかの場所よりは生活がしやすいけれど、それでも例えばアメリカのシリコンバレーに行き暮らすのと、つくばで暮らすのとでは、研究者あるいはその家族にとって、多

分あちらの方が暮らしやすいと思うのです。  
そのへんの問題は、つくばに住むみんなが  
考えなければいけない問題だと思います。

どちらにしても21世紀には地球は小さく  
なって、ピョンピョンといろんな人が入っ  
てきます。だからそれはつくばだけではな  
いのですけれども、日本では割合国際化が  
進んでいる都市として、いいモデルになるように、とにかく努力しな  
なければいけない。



それからあとひとつ、人材の養成ですね。やはり最終的には個人が  
どのように考え、知恵を働かせるかというのが非常に重要な問題だと思  
うのです。このへんを教育できるのか、あるいは、自分たちの問題  
かを考えながら、いい人材が育つような教育機関・研究機関、あるい  
は環境作りが大切です。それをぜひつくばで実現してほしいと思うの  
です。

---

## 東洋的思想と西洋の科学技術とのかけ橋

---

村上 私は生命科学を研究していますので、その立場から一言いわせてい  
たきます。今非常な勢いでバイオテクノロジーとかライフサイエ  
ンスが進んでますけれど、まだ命についてはほとんどわかっていない。  
かび一匹、木の葉一枚つくれないのが現状なのです。

2005年にはヒトの遺伝子暗号が全部解読されるような、そういう時  
代がくる。これはもう間違いなく進むのです。途中で止めることは科

学ではできないわけです。科学はとにかく進歩するのですが、それにいかにつきあうか、いかに利用するかは人間の問題なのです。

その時に東洋の智慧や思想が21世紀に見直されてくると思います。だから、西洋の科学技術と東洋の精神文化のバランスを取っていく必要があるという気がします。そういう点では、つくばは自然環境がいいし、昔から農業を中心に行っている人がおられますので、まさに新住民と旧住民のバランスがうまくできれば、いい街づくりができるのではないかと考えております。

**神 戸** 「命の暗号」ですか、あの中にもサムシング・グレートというのがあります。そういうことをいわれたと思うのです。私はまだ凡人だから、サムシング・グレートというのは、科学者が何か感じているのだ、というような程度しかわかっていないのです。また何か機会がありましたらお話させていただけたら幸いです。

**村 上** どうてい2、3分では話せるものでは（笑）。もし時間をいただければ、いつでも。

**神 戸** では、柏木さんは一番最後にしまして、神林さん。

---

## 流通業の社会的役割

---

**神 林** どこでみなさんの考えと結びつくかよくわかりませんが、私が日頃よく言うことは、流通業というのは、それなりの社会的な役割を

持っているということです。それは現時点の問題でいえば、生協が掲げてきた理念といいますか、そういうものをチェーンストアは事実上追いかけてきたのだということです。

その時のチェーンストアの一番の特徴とは、パートさんの力が非常に強いのです。だいたい正社員とパートさんの比率が、3対7くらい。例えばカスミの標準の店では70人くらいおりますが、そのうち60人は女の人とっていただければいいと思います。

そういうかたちで流通業は発展してきて、いったい自分のお店でどのようなものを売っているかという、スーパーというのはいろいろ批判されてきております。

みなさん見たかどうかわかりませんが、『スーパーの女』という映画が生まれて、チェーンストア業界は真っ二つにわかれまして。「あんな映画が出てこれては困る」というのと「出た方がいい」というのが分かれまして。

でも現実には、自分のお店で働いている主婦たちが、いったい何を考えているのかが大きな問題になったと思うのです。普通、商売というのは「お客さまのために」といって、お店の外にお客さまを見つめるわけですが、実際はお客さまは店の中にいたのが現実だったと思うのです。

そういう中で激しい競争が行われる時に、やはり企業は単に環境問題の外側にいるというよりは、むしろそういうことを自力で解決していかない限り、流通業は成り立っていかないところまで来ていると私は思います。

あともうひとつ、これは一般的なことですが、ずっと流通業に携わ

って非常におもしろいのは、こういうことです。つまり、先ほどシリコンバレーの話が出ました、要するに「この競争社会の中で、強者だけが栄える社会でもいいのか」と脅かされてみんなビクッとするわけですが、商業というのは本当はそういう社会なのです。

これはいつてしまえば、死屍累々といいますか、10年前に栄えた企業は今どうなっているかという話になるわけです。大きくなれば恐竜みたいに動きが取れなくなってくることもございます。

そういう点で、私がこのつくばを中心に、あるいは茨城県の南部から関東地方の北部と考えた時には、非常に激しい競争なのですが、次から次へと新しいスーパーマーケットが現れる。これが結構、カスミのような企業に抵抗する。カスミもまた別の企業に抵抗するという、そういう点では激しい競争の中でお客さまが一番喜んでいるのではないかと思います。ただ、これが全体の市場、状況が非常に硬直化すると、そんな競争が楽しいといってる世界ではなくなってしまうわけですが、現状はそんなにジメジメした市場ではありません。

現在の北関東の状況はそういう状況で、すごくおおらかに、ある程度夢を持ってみんな競争しているという状況が一方ではあるように思うのです。それをどんなふうに、私たちはみなさんの都市づくりに結びつけていくかを考えなければいけないと思っております。

これは結論になりますが、ひとつはやはり、この茨城県という県が狭すぎるのです。例えば、県の西は小山とか古河とか、県境をいったい茨城県の県庁はどう考えているのだろうかと思えますけれど、多分事実上無視していると思えます。

そこから始まって、選挙区の問題もありますけれど、栃木から群馬

にかけて、ある種の自民党の限界を乗り越えたある種の縦断的な政治家の交流が行われているのではないか。あるいは県知事もまた栃木県、群馬県の知事に呼びかける必要はあるのではないか、ということです。

先ほど青年会議所の話も出ましたけれど、むしろ茨城県の外にどんなふうにか財界のメンバーが出ていくかということが、すごく重要な鍵を握っていると思っています。またその条件があるということです。

要するにマーケットが非常に弾力的だということで「福島県に攻め込め」などということは誰もいいませんが、北関東でしたら「ちよどカスミは手頃な競争相手だ」ということは、みんな考えると思います。

しかし、それなりにカスミも頑張っていますし、成田を間に置いて、北関東全体をどのようなかたちで、単に東京都の延長ではない、新しい環境を作るか。それはつくばが中心になる。そういう力を身につけてほしいと思います。

私はつくばはそれだけの力を栃木県や群馬県に対して持っていると思っています。

---

## 雇用力の増進がキーポイントになる

---

三 宮 今、神林さんの方から成田の話が出たのですが、圏央道と常磐新線の整備と関連させて、新しい開発事業の準備をしています。これは地域経済をベースに活性化することが目標のひとつです。そのためにはこの地域に新しい産業が起きて、かつ仕事が増えないといけない。雇用力が増進しなければいけない。雇用力が増進できるかがキーポイント

トになるのです。公団も県も土地を持っています。それがないと、土地を持っているだけではまく、その土地は使っていただかないとしようがない。

使っていただくためには、産業活動だとか経済活動が活発になったり、あるいはもう少しいい住宅がほしいとか、そういうかたちで需要が拡大していってもらわなければならない。そして、そういうことで地域のウェルフェアが増進することに帰着しなければならない。土地がうまく使われないことになると、私どもの仕事は、「なんだここは、まだ何もやってないじゃないか」と批判を受けることになるわけです。

さきほどからシリコンバレーの話が出ていますが、スタンフォード大学ができて、第2次世界大戦がありましたが、30年経って新しい仕事を生み出す力がその地域に備わっていった。たまたまアメリカのいろいろな技術開発というのが軍事技術が中心になって発展した。それが戦後になっているいろいろなかたちで民生化して応用されるとか、その中で特に電子化の進みという変化があって、新しい産業創出をスタンフォード大学を中心に起きた。そうとうの雇用力がシリコンバレーで増進したという、ひとつの時代を経過してあの地域ができたのだと思うのです。

---

## 優秀な人材を集められる条件を整える

---

つくばについてもまず筑波大学が新しいかたちでできた。あるいは国立研究所を集めて近代化して、ようやく30年。基本的な街の骨格が

できて新しい人が住んできて、まだ一代目。ですから、今は揺籃期です。次のステップにどう入るか。日本はものすごい変化でこの戦後を駆けつけてきて、10年くらいで一代すぎる変化をしてきて、これから新しい時代に突入しなければいけない。知的生産性を上げて、その結果を結びつけていくことが必要だといわれているわけです。

そういう意味では、たまたまつくばはそういう流れに乗って最先端のポジションにいる。だから、このポジションを活かせるか。グローバルという話が出ましたが、グローバルとは世界の優秀な人たちは自分の好きなところで仕事をするようになってしまいますから、日本が空洞化することは日本人も含めていい人材がみんな他所に行く。シリコンバレーに行ったり、アジアの各国に行ったり、あるいは中国に行ったりというかたちで、つくばも含めて日本が見捨てられてしまうことになりかねない危険性も伴っているわけです。それではいけないことがいちばんの課題かと思っています。

今までのしきたりで行けるのか、あるいはしきたりのどこを打ち破らなければいけないのか、そのためにどうするかが課題だと思います。

一応先ほど50代の研究者が非常に多いという話でしたが、50代といっても20年か30年くらい、まだ活動できる時間があります。かつ若い人が後から続いているとしますと、そういうところで、一通り終えて、自分の個性というのですか、いろんな束縛から離れて自由に個性を発揮できる期間というのは、いわば第二の人生といわれていますが、そういう時期を迎える人が非常に沢山います。

それから国研システムができていますから、そこに人を集められる条件があります。全国、全世界から人を埋められるという条件があっ

て、さらにそれをうまく使って、もう一回り拡大すればかなりの可能性を引き出すことができるのではないかと個人的には思うのです。

その条件をうまく活かしていただけますと、雇用力が増進し、施設や住宅の立地が活発になり、土地がうまく売れまして（笑）、メダタシメダシということになりますので、そのへんよろしくお願ひしたいと、こういうことでございます。

---

## まとめ

---

**神 戸** 最初に街づくりの原点ということでお話がありました。私も耳が痛いのですが、科学と技術、あるいは文化と文明をよく区別して、そこから始まり、街づくりの最後の原点である地元の関係、柏木さんは確か技功という言葉をだいぶ使われておられます。そういう意味の結びつきを考えて、つくばの街をシリコンバレーにというだけではなくて、原点をもう一度見て、そのうえでみんなの知恵を集めていこうということだと私は考えているのですが、どうでしょうか。

**柏 木** おっしゃるとおりだと思うのですが、実は先ほどの共同利用システムのお話を少しだけ。これは私自身が現役のころいちばん困ったのは会計法上、制度の問題です。実際に現場にいる人間にとってはそんなこだわりを持ちたくないと思っけていても、それは法の定めるところによって、なかなかうまくいかない実態があることをご理解いただきたいと思っけています。

どうしたらいいかと申しますと、私立の大学なり私企業の集団なり、

そういうものがひとつ起爆剤になって、そういうことができるような場を提供してくださるのが、たいへん望ましいかたちではないかと考えております。

それから、神林さんから「それでシリコンバレーができるのか」と迫られたといいますけれど、実は今、財界こぞって規制緩和といっておられるわけですが、今、少なくとも大手の企業になっている皆さん方は規制で儲けてきている。

そういう意味では規制を撤廃した時にどうなさるのか。規制を撤廃すれば必ず痛みが生じるわけです。そうなりますと、自分の痛みを感じるようになる。「いや、こんなはずではなかった。これは違うぞ」といい出すのです。

したがって私はあえてここで、念を押したいのはそういう意味で、「香さん、それを納得したうえでやって下さい」と。そのかわり神林さんがおっしゃるように「流通業と同じように栄枯盛衰が伴います。それも覚悟していただきたい」ということを私は強く申しあげたいと思うのです。

それから国際化に関しましては、そのこと自身を取り上げるのはおかしいのです。私自身は通商問題やG A T Tの問題もございしますが、研究者が自由に関税貿易障壁を取除いて、自由に出入りができるつくばです。もちろん先ほど神林社長がおっしゃったように内外格差があってはいけないわけで、これも取っ払わなければいけないもののひとつだと思います。

そういう意味で、もう国際化ということを俎上に載せるのは遅いので、むしろ周りの文化を吸収、同化して、新しいどんな文化を創った

らしいのかということ、ぜひこの地におられる皆さん方でよくお考えいただきたいと思います。

それから、もう二つばかりあるのですが、最初のほうは、トランスレーター。研究所と地元企業の間にはギャップがあるので、これは田崎先生のお話で出ていたと思うのですが、両方の話がよくわかるトランスレーターというのがどうしても必要になってくる。

これをどちらにもわかるようにきちんと説明して下さる方が必要なのです。たとえば田崎先生のお話が先ほど出ていたようですけども、ひとえにあの先生の人柄というのがポイントなのです。誰でもいいという話ではないのです。ですからそのところはゆめゆめ忘れないようにしていただきたいと思うのです。ぜひそういう意味でのいい人材を筑波大学をはじめ研究所からもどんどん放出していただいて、トランスレーターがうまく活躍できる場ができることはたいへん望ましいことだと私自身も思っております。

最後に、21世紀に向かって、一般的に労働の価値観の変化がおきるといわれています。21世紀を背負う若者が何に、勤労なり労働の価値を見いだすかという、美の追究、またはやりがい、生きがい、そうだろう、ということをおられる方がおられます。私自身もそう思っているわけですけども、そういうものを感じさせる勤労なり労働、または研究がこの地に育つような環境をぜひお整えいただきたいと思います。

**神戸** 最後に飯泉さん、この問題をお聞きになっていかがですか。私はつくばという地にこの研究学園都市ができて、新旧の人間がいます。こ

れからはつくばの地区内地区外の人を入れた一体感をどうやって作っていくか、市の行政が非常に重要だと思うのですが、そのへんのところをまとめていただいて終わりにしようと思います。

**飯 泉** 現在、このつくば市は新旧住民といういい方をするのですが、私はもうそういう時代ではないと思っています。そういうものではなくて、新しいものと既存のものとか混然一体となって新たなものを創造していかなければならない。弁証法的にいうとアウフヘーベンの何か違うものを作り出していかなければならない、そういう時代がきているのではないかと思うのです。

また同時に多くの開発の波が押し寄せてきた際に、それに流されないうようなつくば独自のアイデンティティ、個性というものを打ち出し

ていかなければならない、そういう重要な時期だと思っています。シリコンバレーを真似ることではなくて、シリコンバレーをひとつの手本にしながら、世界に冠たる科学技術の集積都市、そして筑波大学を抱えているこの地域の独自の歩みをして、ひとつの実験都市として手本となる地域として発展していかなければならない、それが使命ではないかと思っています。



そういうものを踏まえまして、その地域に根ざした商業活動なり地域活動をしている私たちにとりましては、非常に期待感を持っていると同時に、つねに閉ざした世界ではなくopen mindでいろいろと勉強

させていただきながらこの地域とともに歩んで行きたいと思います。

**神戸** 今日是非常に貴重な意見、しかも袴をつけない意見を聞かせていただきました。たいへんありがとうございました。お話をずっと聞いてみますと、21世紀に向かってとありますが、それは人間としての原点に帰っていくということだと思います。それからつくばという原点に、一方ではあるものを、一方ではそれをうまく使い分けていく。そういう共通観念を持っている。だからそれを実現する方途をみんなで見つけていこう。そのようなことで終わらせていただきます。

どうも今日はありがとうございました。



座談会

**21世紀に向かったの“つくば”を考える** TUTC Library—22

——産・官・学・民 「共生」への課題と展望

21世紀つくばへの提言 シリーズ6

---

発行日 平成10年3月

発行人 坏 叔男

発行所 財団法人 つくば都市交通センター  
〒305-0031 茨城県つくば市吾妻1丁目5-1  
☎0298(55)7211 FAX0298(56)0311

非売品

---



## T U T C ライブラリー 一覧

1. (シンポジウム) つくばの交通問題を考える
2. (レポート) つくばのバス輸送のあり方
3. (シンポジウム) つくばのバス交通を考える
4. (レポート) つくばセンターの駐車場利用調査
5. (レポート) つくばの交通に関するアンケート
6. (シンポジウム) つくばの交通をどうするか
7. (座談会) 地方都市と交通——つくばの問題を中心に——
8. (市民レポート) 自転車のあるつくばの楽しい生活
9. (座談会) 筑波研究・学園都市の草創期を語る
10. (座談会) つくばのショッピングセンターのあり方  
——21世紀の都心形成の展望
11. (座談会) つくば南1駐車場をめぐって
12. (レポート) つくばのバス輸送のあり方2
13. (座談会) 常磐新線と土地問題——今なぜ大規模宅地開発か
14. 新しいつくばの歴史 中学生社会科用副読本
15. (座談会) 常磐新線と地域開発——つくばを中心に
16. (座談会) 新しいつくばと研究者
17. (座談会、レポート) つくばの交通事故
18. (座談会) これからのつくば——長ぐつ時代の市民が語る
19. (座談会) つくばと情報革命——21世紀つくばへの提言
20. (基調講演、シンポジウム) 街づくり“構想力とその推進”  
——“都市開発プロデューサー”の役割を探る——
21. (レポート) つくば・土浦の交通に関するアンケート



